

いかにして普遍的慈愛の原理は進化論的に説明されうるか  
How the Principle of Universal Benevolence Can Be Evolutionarily  
Explained

古手川由樹

**Abstract**

Katarzyna de Lazari-Radek and Peter Singer argue that the belief in the principle of universal benevolence cannot be evolutionarily explained and thus avoids evolutionary debunking arguments. Critics have challenged this view by attempting to provide evolutionary accounts for the origin of this belief. However, these accounts, though promising, need to be complemented. To this end, I suggest an explanation of the principle of universal benevolence as having arisen from partial altruism, which, when combined with analogical reasoning, expanded the scope of moral consideration to all sentient beings.

**(1) 研究テーマ**

倫理学領域における進化論的暴露論証には多様なバージョンが存在する。本稿はそのうち、道徳的信念の一部のみを暴露することを目指す局所的(local)な進化論的暴露論証の代表例の1つと目される Lazari-Radek & Singer (以下、先行研究にならって LRS と略記する) の論証を取り上げ、批判的に検討する。特に、功利主義を構成する「普遍的慈愛の原理」の信念の起源は進化では説明しえず、それゆえ暴露を免れる、という LRS の主張を批判し、この信念の起源を進化論的説明と切り離さずに説明する方法を考える。

**(2) 研究の背景・先行研究**

**(2.1) Lazari-Radek & Singer による普遍的慈愛の原理の擁護**

まず、主に LRS (2012) をもとに、それと概ね同内容である LRS (2014, ch.7) も適宜参照しつつ、2人が普遍的慈愛の原理を擁護する理路を確認する。

LRS は、進化の選択圧がかかるのは客観的に真なる道徳的信念に対してではなくあくまで生存や繁殖上有利な道徳的信念を形成する傾向性に対してであるので、私たちの道徳的信念のうち進化の影響下にあるものは真理を追跡しておらず、偶然にもその信念が真であるとしたらそれは信じがたい幸運だ、という進化論的暴露論証の考え方に則り、いくつかの道徳的信念の正当化を

掘り崩す(LRS 2012: 13-14, 21-22)。他方で同時に LRS は、私たちには自然選択を直接受けて進化した直観とは区別される、古典的功利主義者の Sidgwick が「理性的直観」と呼ぶ類の、道徳的真理を把握する理性的能力が備わっているともいう(ibid. 16)。だが、進化が追跡するのが道徳的信念をもつことの適応度であって道徳的真理ではないのであれば、道徳的真理を把握する理性的能力は適応上中立であるか、あるいは非適応的にさえなりかねない。そうだとすれば、なぜこうした能力が私たちに備わっているのか。

LRS の仮説によれば、その理由は以下のようなものである(ibid. 16-17)。理性的能力は、前提から結論への妥当な推論を行う能力のような、生存や繁殖の成功率を高める能力のほかにも、高度な数学・物理学の真理やある種の規範的な認識論的真理、そして道徳的真理を認識する能力など、生存や繁殖には役立たないようなモードの能力も含んでおり、そうした複数の異なったモードの推論能力を含んだ一般性のある「パッケージ」として進化した。そして、いったんそのような一般的な理性的能力が自然選択を受けると、それに伴って生存には役立たないような真理を認識したり発見したりすることも避けられなくなると考えられる。こうして、適応的だとは考えられない道徳的真理を把握する理性的能力が獲得される。つまり、LRS の仮説では、道徳的真理を認識する能力は直接自然選択を受けたわけではなく、より一般的な理性的能力の進化の副産物として生じたということになる。

そして、そのような理性的能力によって直観される道徳的真理（の 1 つ）と 2 人が見なすのが Sidgwick 流の「普遍的慈愛の原理」、すなわち、宇宙の視点に立ち、見ず知らずの他人や他の種の有感な存在者を含め全ての個体の善を偏りなく配慮することを要求する公理である。血縁者、協力関係にある相手、自身が属する内集団のメンバーなどを優遇する限定的で偏頗的な利他主義が適応的だと考えられるのに対し、普遍的慈愛のような不偏的な利他主義は適応的だとは考えづらく、進化はそうした不偏的な利他主義の頻度を上げるどころかむしろ下げるように働くと考えられるので、この信念の由来は進化によっては直接説明できない(ibid. 19)。

同様の主張は Singer (2005)にも見られるが、そちらに対しては Kahane (2011: 119)が「偏頗的な利他主義の傾向性自体が進化によって選択されたものなら、それを理性的推論によって拡張したもの(reasoned extension)の認識論的地位もまた疑わしいはずである」と反論している。つまり、もし普遍的慈愛のような不偏的な利他主義の信念の起源が、偏頗的な利他主義の信念を理性的推論によって拡張したものとして説明されるのであれば、推論の出発点である偏頗的な利他主義の認識論的地位が疑わしい以上、そこから導き

出される不偏的な利他主義もまた疑わしいはずだ、ということである。

LRS は、この反論に対して次のように応じる(LRS 2014: 191-192)。確かに、出発点となる信念が進化によって選択された傾向性に由来するなら、その信念をより一般化したものも支持することはできないという点は正しい。しかし、ここでいう Sidgwick 流の普遍的慈愛の原理は、利己主義や偏頗的な利他主義を理性的推論によって拡張して到達できるようなものではなく、自分にとっての善は宇宙の視点から見ても善いものであるという実質的主張があって初めて成り立つ。このような信念は自明なものとして直観される公理であり、理性による拡張によっては到達できない。

LRS によれば、一般に以下の 3 要件を満たす直観は可能な限り最も高い信頼性をもつ。そして、普遍的慈愛の公理の直観はまさにこの 3 要件を満たしている(ibid. 26-27)。

1. 自明であるという確信に至る注意深い反省
2. 他の注意深い思想家らによる独立した合意
3. その直観を進化論的プロセスやその他の非真理追跡的なプロセスの結果として説明するもっともらしい説明の不在

## (2.2) 普遍的慈愛の原理の信念の起源を説明する既存の試み

本稿で問題にするのは、普遍的慈愛の原理の信念の起源は直接には進化で説明できないという LRS の主張である<sup>1</sup>。2人は、この原理が自然選択を直接受けた適応的な直観によってではなく、それと区別される特殊な理性的直観によって認識されるというが、このことは正しいのだろうか。この点に関しては、2人は普遍的慈愛の原理にもいずれ満足のいく進化論的説明が現れるかもしれないことは認めており(LRS 2014: 194)、反証の可能性に開かれているといえる。とはいえ、前述の通り不偏的な利他主義は偏頗的な利他主義よりも適応度が低く、単純な自然選択によっては淘汰されると考えられる。そのため普遍的慈愛ないし不偏的な利他主義の信念の起源を進化と切り離さずに説明しようとするなら、それが偏頗的な利他主義に適応度の上で圧倒されてもなお持続し得たことを示すことが要求される。私の見る限り、これまでそうした説明の試みとして(Kahane (2011)のように理性による拡張に訴えるもの以外では)次の2つの方向性のものが提案されてきた。

第一の説明は、Andes (2019: 365-370)や太田 (2021: 118)が示唆する、普

遍的慈愛の信念は進化的基盤をもつ直観を後づけ(*post hoc*)で合理化したものだとするものである<sup>2</sup>。この種の説明の要点を述べれば次のようになるだろう。Haidt (2012)などの道德心理学的研究によれば、道德的判断のもっともらしさや自明性は多くの場合、生得的な道德基盤から生じる直観的な情動的反応に対して後づけで理性的推論を働かせた結果生じたものである。そして同時に、人間は自身の心情や状況に合わせて都合のよい作話をする存在であり、しばしば自分の判断の本当の理由に気づくことができない(*ibid.* ch.4)。普遍的慈愛の原理についてもまた、実際は進化的基盤から生じる直観を追いかける形で理由を後づけして合理化したものにはすぎない、という説明が成り立ちうる。そうだとすれば、普遍的慈愛の信念も進化的基盤から生じる直観を介して進化の影響下にあり、真理ではなく適応度を追跡していることになる。このように、道德的判断の源泉となっている直観を覆い隠す、作話的な後づけの合理化に訴える説明が第一の可能な候補である。

第二の説明は、文化進化に訴えるものである。あらゆる個体を偏りなく配慮することを要求するような利他主義が文化進化によって生じたことを示唆する研究として、例えば、LRS に応答する文脈においてはではないが Luco (2021)がある。Luco はあらゆる民族、人種、有感な存在者にまで及ぶような共感能力のあり方を「拡張された慈愛」と呼ぶ。Luco が人類学や文化進化の研究を引きながら論じるところによれば、拡張された慈愛は内集団を超えた部族間での協力に際して自分たちが協力者として信頼できることをシグナルする目印として機能した(*ibid.* 170)。また、共同体内の一定以上の割合の人が受け入れた規則や規範に従う頻度依存バイアスや、共感に根ざした内容バイアスが、拡張された慈愛の学習を促す伝達バイアスとなり、さらに近代における交通・通信技術の普及といった社会環境の変化が他者との接触や他者の視点を取得する機会を増やし共感を促したことで、慈愛の範囲がすべての民族、人種、有感な存在者にまで拡張されたのだとしている(*ibid.* 170-172)。

このほか Cofnas (2022, sec. 3-4)も、直接の説明の対象としているのは普遍的慈愛自体ではなく、多くの宗教的・倫理的伝統に現れる「黄金律」的な考え方ではあるが、一部で宗教の文化進化に訴えてこうした考え方の起源を説明することで、LRS を批判する。このように文化進化に訴える説明が第二の可能な候補である。

### (3) 筆者の主張

前節後半で挙げた普遍的慈愛の信念に関する2つの説明はいずれも重要な指摘を含み、少なくとも部分的には正しいだろう。しかしいずれもそれだけ

では、なぜ適応度では勝るであろう偏頗的な慈愛の信念ではなく、普遍的慈愛の信念の方こそが真であるように（少なくとも功利主義者には）思われるのかを完全には説明できないと考えられる。以下でその理由を述べる。

まず後づけの合理化に訴える説明を検討する。普遍的慈愛の信念が理性によって直観されるように見える理由を説明するためには、最終的にはそうした作話的・自己欺瞞的な合理化が働いていることに訴える必要があるのは間違いない。だが、この説明だけではなぜ合理化の結果として生じるのが偏頗的な原理ではなく不偏的な原理であるのかを十分に説明できない。なぜなら、進化的基盤をもつ直観の及ぶ範囲が血縁者や協力相手などに限られることを受け入れるなら、それを後から合理化した結果として生じる原理もまた限られた範囲をカバーする偏頗的なものでもありうるはずだからである。それでもなお不偏的な原理の方が直観的に正しいと思われるとすれば、その直観は何に由来するのか。この点は後づけの合理化だけでは十分に説明されない。

次に文化進化に訴える説明を検討する。文化進化に訴える説明は慈愛の範囲が社会環境の変化の影響を受けて徐々に拡大していったことを指摘する点で重要だと考えられるが、こちらもそれだけでは慈愛の範囲が善を享受するあらゆる個体にまで及んだことの説明としては十分ではない。なぜなら、非ヒト動物などを含む全個体との間に血縁関係や互惠的关系を想定することはできない以上、ここでも普遍的慈愛は偏頗的な慈愛に容易に駆逐されうるからである。伊勢田（2012: 133-134）も指摘するように、二重継承説のような文化進化のモデルにおいて、黄金律的な要請を含まないような行動パターンが広まることは十分考えられる。Luco（2021: 174-175）はこの点に関して、規範に従う傾向性や共感といった伝達バイアスそれ自体は祖先の環境で生存・繁殖に役立った適応であっても、その産物である文化変異は適応でないことがありえ、拡張された慈愛それ自体が適応ではないことと拡張された慈愛を生み出した伝達バイアスが適応であることとは矛盾しないと応答する。しかし、これによって示されるのは文化進化においては非適応的な拡張された慈愛が存在することが可能だということのみであり、それが偏頗的な慈愛に駆逐されず持続したことは示されていない。

以上の理由からこれら2つの説明は普遍的慈愛の信念の起源を完全には説明できていない。それを踏まえ、本稿においてこれらの説明を補完するものとして再検討したいのは、Kahane が示唆していたような、進化論的に説明される信念を出発点とし、それを（後づけの合理化とは異なる形で）理性の働きで拡張することに訴えるアプローチである。だが2.1節でみた通り、LRSはこのようなKahaneの説明を退けていた。そのためこのアプローチをとる

ためにはまず LRS の Kahane に対する応答を棄却する必要がある。

本稿の見るところでは、偏頗的な利他主義（や利己主義）からの理性的拡張によっては不偏的な利他主義に到達できないという LRS の指摘は一面では正しいが、Kahane への応答としてみると問題がある。なぜなら、確かに両者の間にはギャップがあるかもしれないが、本来 2 人が示す必要があるのはそのことではなく、むしろ推論の健全性はどうか。理性の働きによって偏頗的な利他主義を不偏的な利他主義へと拡張する傾向性を現実の私たちがもたないことだからである。人間の実際の思考は必ずしも論理学などの規則に従っておらず、むしろ記憶された文脈と類似した文脈情報をもつ問題群にうまく素早く対処するよう設計されているといった指摘(鈴木 2020, ch.1)を踏まえれば、偏頗的な利他主義と不偏的な利他主義との間にギャップがあるとしても、両者の間を飛躍し架橋する仕方で理性が働く可能性は排除されない。

それゆえ LRS の主張に反して、理性的推論による偏頗的な利他主義の拡張に訴えることはやはり可能である<sup>3</sup>。実際に道徳心理学・進化心理学の領域でも、Greene (2013: 201-202=2015: 266-268)、McCullough (2020)などが、進化的基盤をもつ共感などの能力に理性の働きが加わることで、共感の及ぶ範囲を超えてモラルサークルが拡大したことを（曖昧さはあれど）支持している。以下では Greene に比べて理性の働き方を具体的に述べている McCullough (2020, ch. 14)を参照しながら、そのプロセスを素描する。

McCullough は互惠的報酬や評判への欲求に訴える既存の利他行動の進化理論では人間の思いやりが見知らぬ人にまで拡大してきた歴史を説明し切れないとし、理性が果たした役割を強調する。特に McCullough が注目するのは、特定の側面に関して同一の物事はその側面に関して同様に扱うべきだという「同一性(identity)」の概念であり、3-2 と 1 を数学上重要な全ての場面で等価なものとして扱うべきであるように、倫理に関連する側面で同一の物事は倫理に関して同様に扱うべきだという考え方が他者への配慮を広げたとする(ibid. 2020: 270=2022: 354-355)。さらに通信や交通などのテクノロジーや科学、国際貿易の発展が効果的な援助の手段や相互依存関係をつくり出したことも、思いやりの拡大を促した(ibid. 2020: 271-278=2022: 357-366)。

McCullough が言う同一性概念に基づく理性的思考は類推による推論とも言い換えられるだろう。以上のことを普遍的慈愛の信念の形成に即して考えれば、例えば次のような仮説が立てられる。すなわち、はじめに私たちには血縁者や協力相手の善を道徳的に重んじる、偏頗的な利他性が進化によって備わっていた。その後、Luco や McCullough が指摘するような社会環境の変化もあって、次第に互惠的關係にない赤の他人や動物などの状況や生態も知

られていくにつれ、類推的な推論によって私たちと同じように快苦などの善を享受する能力をもつ他者を私たちと同様に扱うべきだという信念が生じた。そうしてモラルサークルは漸進的に拡大し、普遍的慈愛の信念に到達した。

もちろん、偏頗的な利他主義と不偏的な利他主義との間にギャップがある以上、この類推的推論が成り立たないこともありうる。「血縁者や協力相手の善」と「赤の他人の善」は誰の善かという点で異なり、別様に扱われる余地が常にある。とはいえ類推的な思考においては（準）抽象化によるカテゴリー化が行われることが指摘されている（鈴木 2020, ch.6）。それゆえ、こうした場面で比較される個体の善が、「両者を含むより大きなモラルサークルに包摂される個体の善」として抽象化されるとすれば、このような類推的推論が進むことを想定することはやはり可能だろう。そして、こうしたモラルサークルの拡大が社会環境の変化などを反映した漸進的なものであればあるほど、上記のギャップを埋めるような抽象化を伴った類推を行う上での心理的抵抗は減じるだろう。

#### (4) 今後の展望

以上では、普遍的慈愛の原理の信念の起源を、進化論的説明から切り離さず、かつなぜそれが適応度では勝るはずの偏頗的な慈愛よりも（少なくとも功利主義者には）もっともらしく思われるのかに答えられるような仕方で説明するために、進化的基盤をもつ人間の偏頗的な利他性と、理性的推論によるその拡張との協働に訴える説明を提示した。だがこうした説明はまだ十分に具体化や実証がなされているとは言いがたく、この点を道徳心理学や進化心理学の実証的研究と結びつけて検証し深化させることが今後の課題となる。

#### 注

1. 普遍的慈愛の原理は、そこで言われる当人にとっての善（福利）が何であるかを規定する信念が進化論的暴露の最有力候補である以上空疎になる、という理由で批判されることもある（Kahane 2011: 120; 2014: 330-331）。とはいえあくまで LRS の「第一の目的は、偏頗的な理由は暴露することができ、かつ、私たちには何であれ究極的な善を偏りなく目指すべき優先的理由がある、と示すことであり」（LRS 2012: 28, 傍点筆者）、福利についての信念が暴露されただけでは普遍的慈愛の信念自体はまだ暴露されていない。

2. 太田がこうした説明が成り立つ可能性を示唆するのは、直接には普遍的慈愛の原理ではなく功利主義に対してであるが、ここでは後者のうちに前者も含まれるものとみなす。

3. 理性がモラルサークルの拡張に寄与すること自体は Singer も認めるだろう。彼は『拡がる輪』において「理性的推論は本質的に拡張主義的である」(Singer 2011: 99)と述べている。本稿の説明が Singer の説明と異なるのは、その推論が進化論的に説明・暴露される前提から出発している点である。

#### (5) 参考文献

- Andes, P. (2019). "Sidgwick's Dualism of Practical Reason, Evolutionary Debunking, and Moral Psychology." *Utilitas* 31 (4): 361-377.
- Cofnas, N. (2022). "The Golden Rule: A Naturalistic Perspective." *Utilitas* 34 (3): 262-274.
- Greene, J. (2013). *Moral Tribes: Emotion, Reason, and the Gap between Us and Them*. Penguin Press. (ジョシュア・グリーン(2015)『モラル・トライブズ』上・下, 竹田円訳, 岩波書店)
- Haidt, J. (2012). *The Righteous Mind: Why Good People Are Divided by Politics and Religion*. Pantheon Books. (ジョナサン・ハイト(2014)『社会はなぜ左と右に分かれるのか』高橋洋訳, 紀伊國屋書店)
- Kahane, G. (2011). "Evolutionary Debunking Arguments." *Noûs* 45 (1): 103-125.
- Kahane, G. (2014). "Evolution and Impartiality." *Ethics* 124 (2): 327-341.
- Lazari-Radek, K. & Singer, P. (2012). "The Objectivity of Ethics and the Unity of Practical Reason." *Ethics* 123 (1): 9-31.
- Lazari-Radek, K. & Singer, P. (2014). *The Point of View of the Universe: Sidgwick and Contemporary Ethics*. Oxford University Press.
- Luco, A. (2021). "The Cultural Evolution of Extended Benevolence." In De Smedt, J. & De Cruz, H. (eds.), *Empirically Engaged Evolutionary Ethics*. Synthese Library. Springer: 153-177.
- McCullough, M. E. (2020). *Kindness to Strangers: How a Selfish Ape Invented a New Moral Code*. Oneworld Publications. (マイケル・E・マカロー(2022)『親切の人類史』的場知之訳, みすず書房)
- Singer, P. (2005). "Ethics and Intuitions." *The Journal of Ethics* 9 (3-4): 331-352.
- Singer, P. (2011). *The Expanding Circle: Ethics, Evolution, and Moral Progress*. Princeton University Press.
- 伊勢田哲治 (2012)『倫理的に考える』勁草書房.
- 太田紘史 (2021)「二つの倫理学領域における進化的暴露論証: 対比と反省」,



『社会と倫理』, 36: 107-120.

鈴木宏昭 (2020) 『類似と思考 改訂版』 筑摩書房.

(京都大学)